

多文化関係学会ニューズレター 第2号

2003年2月

Japan Society for Intercultural Relations

内容

大会報告 大会参加記 大会プログラム 理事会 総会記録 編集後記

～ 大会報告 ～

多文化関係学会第1回年次大会を終えて

大会準備委員長 久米昭元（立教大学）

2002年11月23日（土）に東京池袋の立教大学で多文化関係学会の第1回年次大会が、「関係性の中から文化を問う」という大会テーマの下、約90名が参加して開催された。午前9時から午後6時過ぎまで大会プログラムはほぼ予定通り消化され、その後和気あいの懇親会が午後7時半に終了した。大会の準備から開催に至るまでの経緯と当日の印象を簡単に述べてみたい。

当学会は2002年6月22日に青山学院大学で設立総会と記念シンポジウムを開き、活動をスタートさせ、その日に立教大学で第1回大会が開催されることが発表された。8月31日と9月1日の両日プリティッシュヒルズで開かれた理事会で大会テーマ、基調講演、シンポジウムの構想が練られたが、その時すでに大会開催まで3ヵ月足らずで、内心は不安で一杯であった。しかし、幸いにも大会の中心となるシンポジウムのテーマが、喧々諤々の議論を経て「多文化関係のダイナミズム－関係性の中から文化を問う」というタイトルにほぼ収斂され、安堵した。そして、その場で基調講演を会長に依頼し、快諾を得、そのタイトルも「多文化関係研究への期待」と言う形ですんなり決まった。

一つの不安要素は、会員による研究発表の内容と数であった。初め、学会のホームページに研究発表の募集要領を掲載したが、インターネットを見ない会員もたくさんいるはずと言う指摘があり、9月末に急ぎよ会員のメールに大会の案内と募集要領を流した。その結果、最終的には17件の研究発表が決定され、その内容は心理、社会、言語、コミュニケーション、地域間研究を柱とす

る当学会の主旨に沿うものが多く、当初の心配は杞憂に終わった。但し、各発表者の発表時間が45分から30分に省略せざるを得なかったことは本当に残念だった。

もう一つ残された課題は、午前中のシンポジウムの流れを受けて、午後に参加者間で自由に意見交換ができ、今後の学会の進むべき方向が少しでも示唆されるような「オープンフォーラム」ができないかどうかということであった。大会準備委員会での度重なる審議の結果、「日本社会の危機現象を探る－リーダーシップのあり方をめぐって」とすることに決まり、それぞれユニークな背景をもつディスカッサントをお願いすることができた。

研究発表では、なかなか活発な討論がなされたし、すでに発表者に容赦のない批評も出るなど学会本来の姿勢が垣間見られたように思われる。基調講演、シンポジウム、オープンフォーラムもそれぞれの持ち味が発揮された。基調講演では地域研究の発展と行き詰まりの経験から特に関係性の研究を重視する当学会に対する期待が熱く語られた。シンポジウムでは、基調講演を受けた形でクレオール化現象研究の重要性、関係性における不平等性の問題、文化間をつなぐゲートキーパーの存在など、今後の研究・教育に貴重な示唆が与えられた。オープンフォーラムでは日本のビジネス、日中関係、日本人の性格とリーダーシップ特性などについて数々の鋭い知見が伺われ、会場からの質問も活発であった。しかも、たびたび会場全体が笑いに包まれるなど、私が経験した学会にはあまり見られない雰囲気を感じられた。

大幅に遅れた大会案内、色々不備があった当日の大会であったにも拘わらず、多数の参加者に恵まれた。海外からの参加も含め、全国各地から駆け付けていただいた参加者、研究発表者、各セッションの司会者、ディスカッサントの方々には衷心より感謝の念を表したい。また、理事会のメンバー各位、小松大会準備副委員長、開催が近づくにつれてグループとしての力を結集していただいた立教大学の準備委員会各位に対しても深謝したい。来年の神田外語大学での大会がさらに盛大かつ有意義なものになることを祈念している。

～ 大会参加記 ～

石井敏 独協大学

設立後間もない本学会の第1回年次大会は、種々の課題を今後に残しながら、全体的に大成功のうちを終了した。成功の背景には役員、大会準備委員、会場の立教大学、そして多くの会員の積極的な協力があったことを改めて痛感した。

基調講演者の石井会長は、本学会が従来閉鎖的・排他的な研究分野の枠を超えた学際的性格を具え、対立型ではなくクレオール型の多文化関係の確立および維持を目指した研究・教育を推進すべきであるという点を力説した。民族紛争や異文化対立が世界各地で多発している現在、参加者の多くは氏の主張に共鳴したようである。遠山氏の司会によるシンポジウムでは、第1発題者の石井氏は異文化接触がクレオール型の相互に建設的な関係を生み出すべきであるという点を再度強調した。第2発題者の手塚氏は日本と異文化の関係性を歴史的に概観し、文化と個人レベルにおける異文化適応と不適応の問題を論じた。問題を個人的経験談から広く一般化する発言の展開が必要であると感じた。最後の発題者である白水氏は、異文化関係は人間学であるとして、ハワイにおける沖縄民族のアイデンティティ問題について解説した。氏の論点も個人的研究報告が中心であり、本学会が目指す多文化関係研究・教育の方向性を示唆するには至らなかった。本学会が今後一層発展す

るためには、活動目的と方向性を大局的立場から体系的に論ずる研究者・教育者の参加および発言が不可欠であるという感想をもった。

関係理事の計画的な準備により、総会は短時間で円滑に進行した。しかし総会が学会の最高議決機関である以上、次回までに開催の手続きと形式を確立し、必要な準備を早めに進めることを提案したい。オープン・フォーラムについては、主題が時局的であるがやや抽象的すぎたために、発題者と一般参加者双方の発言目的と焦点が不明瞭で散漫になるという傾向が認められた。研究発表の面では、研究主題の多くが異文化コミュニケーション論領域に偏向しているという印象を受けたが、全体的に高水準であり、従来のような欧米中心の研究・教育の紹介および解説の域を脱している点に感心した。今後は、思想・哲学・倫理、理論構築、研究方法論開発等に関する研究発表、本学会が掲げる主要領域の社会、心理、言語、コミュニケーション、地域間関係等に関する一層学際的な研究発表が増加することを希望する。

2003年秋に開催予定の第2回年次大会は質量共に今回以上に充実したものになることを期待したい。

ヒダシ・ユディット 神田外語大学 —もうひとつの学会！？—

多くの方々の関心を集めたなか、多文化関係学会の第一回年次大会が2002年の11月23日に立教大学にて行われました。私は「多文化共生社会における日本語教育」の司会を務めさせていただいたのですが、そう頼まれなくてももとより参加するつもりでしたし、とても興味深く聞かせていただきました。

今年の春、新しい学会が作られるとの話を聞いた時には、「なぜまた、もうひとつ?!」というのが正直なところ私の最初の反応でした。異文化諸問題に関連する学会が世界中数えられないほど多いですし、日本でも、異文化コミュニケーションあるいは異文化接触などを中心にする学会が既に多数あります。私は外国人でありながらその幾つかのメンバーでもあります。しかし、設立準備委員会の名簿を見るとあまりにも私が尊敬している方が多いので、とりあえず六月の設立総会に顔を出してみようということで参加させていただきました。そしてそこで、今までの学会と違う組織であることが分かりました。どこが違うかというと、分野の多様性が一番印象的です。さらに分野がそれぞれ共生しているだけでなく、問題の扱いに対する多分野関連、本当の意味でのインター・ディシプリナリティーが特徴です。この点は本大会での石井会長による基調講演の中でも強く強調されました。又、文化が異なることによる違いよりも、共生のための共通点をどう探せばいいかということを目標とする協業が現在の複雑な世界のなかで何より重要な課題であることも本学会が目指していることであると思います。

大会のそれぞれの発表、講演、ディスカッションを聞きながら思ったことは これらの研究は多文化共生の必要を理解させるのに大きな力になるに違いないということでした。これからも本学会の発展を望んでいます。

山地弘起 メディア教育開発センター

一口に言って、今回の大会はおもしろく、そしてしんどかった。おもしろかったというのは、新

学会立ち上げのエネルギーと、にもかかわらずリラックスした雰囲気の双方がブレンドされて、こちらを巻き込んで興奮させてくれたということのようだ。

しんどかったというのは、1日集中の盛りだくさん、ということだけでなく、我が身に跳ね返ってきた気づき、あらためて無知と非力が露わになったため息と恥ずかしさである。

じつは一番感じ入ったのは、遠山淳氏がプログラムに書かれた「文化も民族も虚構」という部分であった。偶然トイレで一緒になったときに先生にもお伝えしたのだが、そのことは自分には深く響くもので、つまり、それは「私」という虚構と「世界」との関係を問い直すもので、一方ではぱっと身軽になる感覚を与えたと同時に、他方、これまで苦勞して積み上げた（つもりの）努力を軽々しく捨てて離陸できない、その思い切りの悪さ、重さをも感じさせるものだった。先生は「仏教的な見方」と言われたが、「虚構」という言葉ではっきり突き放されて、無意識にしがみついていた習慣的な関わり方がようやく垣間見えた。

そういう目になっていたからなのか、最後のオープンフォーラムでは、司会者含め4人の登壇者のパーソナリティが、お互いにもあまりにも違って、しかもそれぞれに一貫性があることの不思議とおもしろさに感心してしまった。見事なものだと思った。その人その人の志向性（嗜好性？）が、独自の「関わり」のチャンネルで研究と表現に噴き出して、いって、「世界」を伝えてくれる、そういうことなのか、そして、それだけのことなのか。「羅生門」を思い出した。

ひょっとすると、この学会の意味は、多種多様の領域、職種の人々が交差する地点となって、内破しあう力、ひいては状況を穿つ起爆力になる覚悟があるかどうか、しかもそのプロセス自体をもクールに研究してしまう厚顔をもてるかどうか、そこにかかっているのだろうか？？少なくとも、自分にとってはそういう場が欲しい。と、その途端にやってくる、底が抜けるような不安をなんとか持ちこたえて、先に行く、しかないか...なんとひどい学会かと思った。

西堀ゆり 北海道大学 - 絶滅の危機に瀕するか、否か？ -

第1回大会に遠く北海道から参加しました。この学会の趣旨を、メディア教育開発センターの小林登志夫先生から伺った時に、今まで漠然としていた思いが胡散霧消、求めていたものにやっとめぐり合ったと思ったからです。異文化コミュニケーションや比較文化論といった既存の「静的」な境界領域ではない、もっと「動的」でグローバルな動きを伴った領域でなければ、対象を捉えられないと日頃痛感していたからです。

私の活動してきた教育や情報の分野では、今まさに、この「動的な関係性」を明確にしなくてはならない状況に陥っています。インターネットやブロードバンドといった情報技術は目まぐるしく発展しています。情報基盤は私たちの意識よりはるかに猛スピードで整備されてゆき、じっくり考える暇もなく、その速度に目がくらんでいるというのが現状ではないでしょうか。

確かに情報のグローバル化は望ましい。インフォメーション媒介の手段となる共通言語である英語の力を得ると、情報ハイウェイの高速走行は自由自在です。ですが、それは一時、あるいは、下手をすると永遠に、母語や自己の文化を離れてしまうことになります。グローバル化は自己否定になるのだろうか。自国の文化にしっかりと根ざしながら、猛スピードでグローバル基盤を走れるのであろうか。こんな矛盾を解決できるのだろうか。教育に身を置く者にとっては、疑問ばかりの辛い季節になりました。

というわけで、期待に胸ふくらませて、大会に参加しました。その結果は？というと、少し複雑です。石井米雄会長がご講演の中で述べられていたように、「二つのものが接触すると、全く新しいもの、変わったもの、つまり、“positiveなもの”が生まれて来る。」という期待が湧き上がりません。しかも、それが複層して行われるようなグローバル・コミュニケーション時代には、どんなに気宇壮大な“positiveなもの”が生まれるのでしょうか。でも、ひょっとしたら、とんでもない鬼子かも？こんな期待から始まったのですが、大会の終わる頃には、正直に言って、少し複雑な思いに駆られました。

キラ星のような個性と自由に物の言える雰囲気は抜群です。が、ふと気が付いてみれば、コミュニケーション、異文化コミュニケーション、比較文化、人類学の学会で聞いてもおかしくないようなテーマが結構多く、productiveであれ、否定的であれ、「多文化関係のダイナミクス」という統一テーマが明確に見えて来なかったかのような感は否めません。聞く耳の方の能力の問題であれば、問題は解消です。万一そうでなければ、これは由々しき問題です。大会のテーマを「多文化関係」の幾つかの側面に絞るということが必要ではないでしょうか。そして、メッセージ性と共に、研究のための研究に終わらず、提言も行いうる学会になって欲しいと願います。「多文化関係のダイナミクス」に最も不適合なのが、いわゆる一般的「日本人」なのではないでしょうか。その日本人をどうするか、という視点がなければ、この学会も、1980年代の地域研究が絶滅の危機に陥った（石井会長のご講演から引用）ように、絶滅するのではないのでしょうか。

次回大会では、「絶滅の危機には無関係の、不死鳥のごとき学会だ」という声に圧倒されたいと願っています。

今井千景 関西大学

刺激に満ちた楽しい学会だった。目新しさに対する興味も手伝って、わくわくした気持ちで1日過ごせた。感じたこと、気付いたことなど簡単に2つほど挙げてみたい。

まず1点目だが、地に足の着いた研究を大事にする学会という印象を得た。決して机上の空論をふりかざすでもなく、社会生活のなかで生まれた素朴な疑問に端を発した研究活動が、私の出席した発表には多かったように思う。現実の厚みにしっかり支えられた研究とも言うべきか。これはなかなか説得力がある、とややもすると抽象理論に傾きがちな自分への反省もこめて思った。この傾向は是非、継承して行ってほしい。

もう1点は、「異文化間コミュニケーション」という言葉ではなく、あえて「多文化関係」という新しいコンセプトを掲げたのは、どのあたりに狙いがあるのだろうかということ。「異文化間コミュニケーション」というと、コミュニケーションの研究者の間にすっかり定着していて、多少なりとも手あかのついた感がある。文化の垣根を超えていったとき相手文化にどう適応するかという発想が根底にあって、どうしてもぬぐい去れない。でも「多文化関係」という言葉は文化と文化を対等な関係で結びつけるのかもしれない。2つの文化が接触したときに妥協することなく向き合うことで、何が生まれてくるのか。どんな創造がなされるのか。適応ではなく、創造。狙いの1つはそのあたりにあるのかな、と研究発表や基調講演、シンポジウムに出席しながら考えをめぐらせていた。だが新しいコンセプトによって、具体的には何を目指していくのか、「異文化間コミュニケーション」とは何が際立って違うのか、100%明確に把握できたわけではない。向かっていく先の輪郭のようなものをもっと明確に打ち立てていければ、この学会は今以上にエキサイティングな集まりになるかもしれない。

可能性を秘めた学会で、これからどう転がっていくのか目が離せない。

呉小莉 城西国際大学

11月23日、「多文化関係学会」が創立して以来、第1回目の年次大会が立教大学で開催されました。あっという間に終了したこの大会は、初めて参加した私にとっては、この学会における多文化関係研究分野の全体図が見えてきて、とても素晴らしい大会だと思います。

Gou まず、個人の研究発表は、多数の研究領域に渡るもので、学際性を体現し、幅広いテーマで、内容が非常に豊富であったと思います。多文化共生社会における日本語教育、在日外国人の問題、留学生のコミュニケーションにおけるアイデンティティの諸相、異文化教育等ミクロの文化からマクロの文化まで、様々な視点およびアプローチから多文化環境の中の諸問題を取り入れ、研究していることを今回印象深く受けました。

また、基調講演とオープンフォーラムでは、この分野の専門的な研究者のスピーチもとても素晴らしく、質が高いと感じました。外国語教育しか勉強していなかった私にとって、この多文化研究分野はとても魅力的な存在であり、興味深いものでした。

次に、事前に出来上がった「抄録集」は非常に役に立ちました。やはり、研究発表が多いため、どちらを聞こうかかなり悩んでいました。その時、この「抄録集」の内容がとても参考になりました。

また、土曜日なので、年次大会のためにわざわざ大学食堂を開いていただき、大変助かりました。タイトなスケジュールであるため、昼食では、栄養補給が必要なだけでなく、参加者との感想や意見交換の場にもなったと思います。

なお、個人発表と講演は豊富であるため、私個人として聞きたい内容があまりにも多かったので、二日間に分けて実行すれば、学術的交流がもっと深くなるのではないかと考えています。（もちろん、二日間だと、予算の問題も考えないと・・・）

最後に、この大会を順調に進行していくために、たくさんのお仕事をなさった準備委員長の久米先生を始め、院生のスタッフの方々には心から感謝しております。これからも第2次大会や第3次大会を続けていき、もっと多くの人に参加してもらいたい、日本人だけではなく、同じ興味を持つ在日外国人にも参加の機会を拡げていってほしいと期待しております。

～ 理事会記録～

第2回多文化関係学会理事会議事録

場所：ブリティッシュヒルズ WREN 2F ラウンジ

前半 8月30日 20:00~23:00、8月31日 17:00~18:30

出席者：石井米雄（後半）、久米昭元、小林登志生、小松照幸、杉本裕二、遠山淳、徳井厚子、御手洗昭治、和田純、掛札綾（記録）

議案：

1：第1回理事会議事録の承認

満場一致で承認された。

2．理事候補者の推薦

灘光洋子氏（ニューズレター担当）、岡部朗一氏（全国展開）を推薦することとした。

3．新規入会申込者若干名の承認

承認された。

4．定職を持たない人の会員扱いについて

原則的には特別扱いせず、具体的なケースが出てきた段階で個別に理事会で検討することになった。

5．メディア教育開発センター主催の国際シンポジウム・ワークショップ（10月30日～11月1日）に対する学会の後援について。

審議の上学会が後援することになり、できるだけ学会員には参加して欲しいという要望が小林理事より出された。

6．ニューズレターに関する基本方針と記事案

徳井理事からの提案をもとに以下が確認された。

1）基本的にはWeb上のニューズレターとし、必要な人々には印刷して送るという方針が確認された。

2）記事案

a 運営に関わるもの（学会の方針、理事会記録、会計収支決算、年次大会、研究会等の情報、会員への連絡事項）

b 学問的、知的情報（年次大会印象記、研究動向、海外動向、他学会レポート、書評、会員紹介、新刊書紹介、特集記事など）

ただし、ホームページにアクセスしたとき、だれでも読めるニューズレターではなく、広報的な部分を除いて、会員だけがアクセスできるような処置（会員用のパスワードなど）が必要であるという意見

が出された。

7. 学会誌担当理事3名の役割分担

学会誌担当理事の役割について林理事の提案（杉本なおみ一編集長、林吉郎・石井敏副編集長）を承認した。早速、3理事が協議し、学会誌発行の基本方針、学会誌名、投稿規程、引用・参考文献記載方法、評価表、各分野における査読者、予算額など早急に策定してもらうよう依頼することになった。

8. ホームページ

杉本裕二理事が当初から現在に至る間のホームページ制作状況の経過報告を行い、ニュースレターとのリンクについて議論された。

9. 学会タスクフォースの担当者について

タスク8（会員強化）の担当理事（手塚氏、白水氏に急遽、タスク4（来年度年次大会）に回ってもらうよう要望することになった。（関西地区諸活動）をタスク5（全国展開プロジェクト）に組み入れられるのではないかと指摘があり、遠山副会長を中心に計画を練って欲しい旨要望が出された。

11月の大会までに各タスクフォースが決定し、実質的に動き出すことが肝要との意見が出された。

10. 理事会の中の運営委員会（仮称）の設置について

全理事の中から会長が委嘱して数名の理事に常任理事会を構成して業務をこなす案については、この学会では設けないこととした。

11. 第1回年次大会の企画について

石井会長により全国大会だけでなく、少人数でも地区で行う月例会の必要性が提案された。それに対して遠山副会長が、全国展開を全国大会の小型版という形で当面は年3～4回という頻度でやっていく方針を説明した。また会が学会員になるには300人以上の会員が必要であり、会員増と全国展開を連動させつつ努力していくことの必要性が議論された。

今度の年次大会について久米大会委員長は、11月22日（金）18:00～理事会、23日（土）年次大会。プログラムとしては、午前中基調講演とそれを受けた形でのシンポジウム、そして昼食後総会と研究発表を行い、夕方に懇親会をして締めくくりとする概案を提示した。

12. 大会テーマについて

当初出された提案は、「文化の深層を探る」であったが、議論を重ねた上で「関係」を考えることによって文化を再定義することの必要性が強調され、シンポジウムのテーマは「多文化関係のダイナミズム－関係性の中から文化を問う」となった。なお、会長による基調講演の演題は「多文化関係研究への期待」とすることになった。シンポジウムのパネリストとして手塚、白水両理事その他の名前があげられた。

11 石井会長からの寄付について

石井会長より、最近受賞した平成14年度大同生命地域研究賞の100万円を学会に寄付する旨の表明があり、参加者一同深い感謝の意を表した。

以上（記録：掛札綾、議事録文責：久米昭元）

多文化関係学会第一回大会前理事会

場所：青山学院大学総研ビル、10階第17会議室

時間：2002年11月22日18:00～22:00

参加者：上原、久米、小林、小松、白水、手塚、遠山、徳井、灘光、林、御手洗、御堂岡、和田、掛札（書記）

欠席者：石井会長、石井敏、岡部、杉本なおみ、西原、渡辺

議題 1

報告事項

（1）近況報告（会員数、タスク活動、財務状況他）

一般会員117名、学生会員38名で155名。その他未払い会員13名。

青学から9万円、石井先生から100万円寄付をいただいた。

会計監査は年度締めで報告。

（2）1回全国大会について

大会申込者数：はがき申込49通。E-mail 32名、80名程度。

議題 2

審議事項

（1）会則改定について（第1条英文名称）

会則改定 associationからsocietyになる。類似の名があるなど、jairがjsirに変更することに決定した。japan society for intercultural relationsに変更した。

（2）会則改定について（第6条第2項）

副会長は2名より若干名に変更することに決定した。

(3) 学会誌について

執筆要領と、投稿規程、投稿種類、掲載方法等について学会誌委員会からの原案をもとに議論した。要旨を英文和文両方載せることが提案された。

(4) ニュースレターについて

年2回発行

コンテンツはニュースレター委員会、掲載は事務局が行うこととなった。

ホームページのことについて大会でもう一度インフォメーションをする。

ホームページの中での案内とそれ以外の分類について再度検討。

(5) 全国展開活動について

全国での学会関係と関連し、全国展開を図りたい。

(6) 来年度活動予定について

年次大会開催、学会誌、および、ニュースレター発行について議論された。

理事会を年2回の開催に決定した。

来年春に公開シンポジウムを開催することが提案された。

(7) 来年度予算案について

学会誌について、50万円のできる学会誌を考案することが提案された。「石井基金」から10万円出し表紙デザインを作成する、インターネット上で論文を掲載するなどの提案がなされた。

資金調達のために、出版社の広告を取る、公開シンポジウムで寄付を募る、会費を調整するなどの案が出された。

(8) 来年度全国大会開催校について

開催日は11月下旬から中旬にかけての週末(土、日)に、2日間かけて行う。また、総会において大会参加者に打診し、全体的な意向を決定に反映させることとした。

(9) 本年度全国大会開催について

久米大会委員長より、大会経費計約30万円の内訳が報告された。

印刷費：14～15万円 アルバイト/人件費：9万3千円

講演者謝礼：5万円（2人分）

役割分担について、受付は河野氏を中心とする立教スタッフ、出納は和田理事が担当することが確認された。

（10）役員人事について

林吉郎理事が副会長に選出された。

（11）総会議題について

以下のことが話し合われた。

議長を選出する。

理事・役員承認をとる。

以上

多文化関係学会第1回総会 議事録

場所：立教大学8201教室

日時：2002年11月23日（土）13:40～14:00

1．議長選出

メディア教育開発センターの山地弘起会員を議長に選出したのち、小松照幸理事から、6月28日に120名の参加を得て設立総会を開催して会則等を定め、メディア教育開発センターに事務局を置くとともに、ホームページで情報公開を始める形で学会活動が開始された旨の経緯の説明があり、続いて、下記の2および3に関して報告および審議が行われた。

2．報告事項

（1）役員・人事について（役員・理事会メンバ - 紹介）

別紙の役員リストが配布され、顔ぶれが紹介された。

（2）近況報告（会員数、財務状況他）

和田理事より会費支払済みの会員数（一般会員117名・学生会員38名の計155名）が報告され、別紙の会計中間報告が行われた。

（3）学会誌について

誌名を『多文化関係学』（Intercultural Relations Studies）とすること、投稿原稿は論

文と研究ノートの2種とすること、「多文化性の視点」「関係性の視点」「超領域性の視点」「パラダイムシフトへの配慮」の4つの要件を満たす投稿を優先すること、著者校正は一度しか認めないので完成度の高い投稿が期待されていることなど、基本方針に関わる説明が行われ、発行予定時期や装丁等は引き続き検討する旨の付言があった。

（４）ニュー・スレタ - について

「活動報告」「理事会報告」「関連情報」を盛り込んだものを、Eメールやホームページを活用しながら年2回発行する前提で、情報提供等に会員の協力要請がなされた。

（５）全国展開活動・広報活動・来年度活動予定について

全国規模での年次大会（秋）と研究集会（春）を中心に、各地でも研究会を組織する計画が説明され、会員増加に向けての協力が要請された。

（６）来年度予算案について

本年度の実績をベースに考える旨の説明がなされた。

（７）来年度全国大会開催校について

2年周期の計画で開催校の目処を付けていきたい旨の説明があり、来年度は神田外語大学（千葉市幕張）で、10月中旬から11月中旬の適当な週末に2日間開催することとなった。

（８）その他

学会誌への積極的な投稿が要請された。

3 . 審議事項

次の2点について審議が行われ、挙手採決の結果、原案通りに可決された。

（１）会則改定について（第1条英文名称）

他学会との略称の混同を避けるため、英語名称を「Japan Association for Intercultural Relations」（略称JAIR）から「Japan Society for Intercultural Relations」（略称JSIR）に変更した。

（２）会則改定について（第6条第2項）

副会長の職責が過重で、学会活動の全国展開などをテコ入れするため、副会長の増員をはかることとし、「副会長2名」とあるのを「副会長若干名」に修正した上で、新たに林吉郎理事（青山学院大学国際マネジメント研究科教授）を副会長に選任した。

～ 関連学会情報 ～

神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所第13回夏期セミナー

テーマ「人間、こころ、宗教、そして日本人—宗教と日本人の関わりを訪ねる—」

日時：2003年9月12日(金) - 9月14日(日)

会場：ブリティッシュ・ヒルズ（福島県天栄村—最寄駅：東北新幹線新白河）

<http://www.kuis.ac.jp/icci/seminar/top.htm>

異文化間教育学会第24回大会

<http://crie.u-gakugei.ac.jp/iesj/>

日時：2003年5月31日～6月1日

場所：信州大学教育学部（長野市）

日本コミュニケーション学会第33回年次大会

<http://www.japonet.com/caj>

大会テーマ：情報化社会とコミュニケーション

日時：2003年6月21日～22日

場所：北星学院大学（北海道札幌市）

異文化コミュニケーション学会第18回年次大会

<http://www.sietar-japan.org>

日時：2003年6月28日～29日

場所：昭和女子大学（東京都渋谷区）

第11回社会言語科学会研究大会

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/jass/>

日時：2003年3月8日～9日

場所：立教大学池袋キャンパス

(海外)

53rd Annual conference of the International Communication Association

<http://www.icahdq.org>

Conference Theme: Communication in Borderlands

May 23-27, 2003

San Diego, CA, USA

The 2003 Convention of the National Communication Association

<http://www.natcom.org>

Convention Theme: Reaching Our/Reaching In

November 19-23, 2003

Miami Beach, Florida, USA

9th International Conference on Intercultural Understanding and

Communication

<http://www.trinity.edu/org/ics/iccc9.html>

July 24-28, 2003

California State University, Fullerton, USA

The 2003 Conference of International Association for Media and Communication Research

<http://iamcr2003.org.tw>

Conference Theme: Information Society and Globalization: what 's Next?

July 14-16, 2003, Taipei, TAIWAN

～ 編集後記 ～

今回のニューズレターはいかがでしたか。ニューズレター委員会の方針として、できるだけ会員の皆さんの率直で忌憚のない御意見をいただくという方向で編集させていただきました。今後更に会員の皆さんのコミュニケーションを活発にするための媒体として、あるいは相互に刺激し合う媒体としての役割を果たせればと思っております。

ニューズレターに関して御意見があれば、ぜひお寄せください。会員からのニュースとして、掲載しますので、他の学会、研究会、その他の情報があれば、御遠慮なく御連絡願います。さらに、当学会に対しての要望、たとえば、学会員の名簿がほしいとか、関東地区で、このような研究会をするなら参加してみたい、場所は自分の大学を提供してもよい、などといった御要望、御提案などをお知らせいただければ、幸いです。それらを理事会で汲み上げて活発な学会活動をしていきたいと考えています。また大会の発表抄録集の残部がございますので、必要でしたら事務局までお知らせください。

最後に、今回急なお願いにもかかわらず、快く原稿執筆をお引受けくださった方々に心から感謝いたします。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

編集委員 徳井厚子 灘光洋子